

言霊と『古事記』—神話、靈性呪術、政治的イデオロギーとしての言霊—

クラウス・アントーニ(チュービンゲン大学、ドイツ)

「言霊」の観念は古代日本において知的、精神的に重要であったと考えられている。その背後にあるとされる共感呪術的な世界では、モノとその名称の間に本質的な違いを認めていなかったと言われている。これは意味論的にいえば、意味するもの(シニフィアン)と意味されるもの(シニフィエ)の同一化であろう。日本においてこの観念は、コト+タマの複合語である「言霊」によって表現される。タマは「魂・靈力」の意味で、コトは「言葉」と「モノ」の二重の意味である。

歴史的に最も古い用例は八世紀の和歌集『万葉集』にあり、<言霊に祝福された国>という意味の「言霊の幸はふ国」(894)との表現が見られる。中世になると真言仏教のマントラにとって代われ、ほとんど姿を消していたが、江戸時代(1600—1868)の国学や近代の国体国家主義になると、この観念はその起源が古代あるいは神代に遡ると見なされ、日本と日本語の独自で基本的な特徴を示す、ある種のキーコンセプトとして利用されるようになった。

日本の最古の歴史記述である『古事記』は日本神話の最も重要な資料だが、神道の聖典として位置づけられたのはようやく近代に至ってのことである。本発表では同書においても言霊の概念が明確に認められるかを検討する。

こうした立場から論じるのは以下の諸問題である。

- a.『古事記』神話における言霊
- b.『古事記』の帝記部分における言霊
- c.現代の『古事記』解釈における言霊

本発表では、言霊の概念を歴史的状況において理解しようとすると同時に、その現代の宗教イデオロギーにおける基本用語としての役割も併せて探ってみたい。